
黒白アーティスト

蜂蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒白アーティスト

【Nコード】

N5038J

【作者名】

蜂蜜

【あらすじ】

本当な男なのに、ひよんなことから女として歌手活動するはめになつたさくや。彼とユニットを組んでいる女の子、ゆーきは彼をこんなめにあわせた張本人。これから彼らはどうするのだろうか？前編・中編・後編に分けて描きます。

男なのに・・・

今日本で有名な、ものすごく有名な歌手がおりました。

それは2人組みのユニットで、どちらとも女の子です。

・・・外見は。

そのうちの1人、ゆーき（芸名）は真正正銘の女の子。
でも、もう1人のさくや（本名）は、実は、男の子です。

ニューハーフ？

いえいえ。フツーに男子校生です。

2人でユニットを組んで、もう3年になりますが、未だに誰も気付
きません。

というか。

なぜこんなことになったのか。

それは、ゆーきが面白半分でさくやに自分の中学生の時のセーラー
服を着せ、写真を撮り事務所に送ってみたところ、受かってしまっ
たのです。

そのあとに事務所さんに「ウソです」なんて言えるはずもなく・・・
。2人でユニットを組むわけになったのです。

ゆーきはもう18歳。もうすぐ卒業です。

さくやはまだ16歳。新1年生です。

さくやは幸い変声期が来ないし、細いし、顔は中性的だったので、未だにバレません。

いつかはいつかは・・・とか思いながらも、こんなに有名になってしまったからには何も言えず・・・。

さくやの正体を知っているのはゆーきとお互いの家族だけなのです。

この前家で、さくやはこんなことを言われました。

「さくやあ、もうそろそろ言ったらどうなの？」

「誰に？ 何を？」

「自分が男だつてことを、事務所とかファンの皆さんに」

「ムリだよ。ぜってームリ」

そう言い返し自分の部屋へ行きました。

彼はベッドに思い切り飛び込み、大きなため息を漏らしました。

どうせ言わなくてはならないのです。

もうすぐ彼にも変声期がきて、体格も男性らしくなっています。

今の芸能界が死ぬほどイヤというわけでもありません。

先輩方のお話や、ゆーきと一緒に歌の練習をするのも楽しいのです。

でも。

高校生の友達や、普通に男の子として生きたいという気持ちもあるのです。
できれば、男としてデビューしたかった。そう思うことも度々あるのです。

彼の中には2人の自分がいます。

1人はこのまま芸能界に続け、バレてしまったらそのまま引退する決意を持っている。

もう1人はすぐさま芸能界を引退し、男としての浅春を送りたいと思っている。

2人の人格は、どっちにしる彼自身。
選ぶのは彼。

これからどうなっていくのでしょうか？

声が出なくて・・・(前書き)

前半 さくや目線

後半 ゆーき目線です。

声が出なくて・・・

「きゅーたーずさーん、もうすぐ出番ですよーっ」

「ああ分か・・・わ、分かりましたー！」

ふう、危ねえっ。

もうすぐ素が出そうだった。

今日は生放送の音楽番組に出演する。生放送だからな、緊張する。
俺はマイクを持ってスタンバイした。

・・・高音出るよな？

不安になつてきた。

ああ、水飲んでくればよかった。喉がカラカラ・・・。
まあたつた三分半。頑張ろう！

「さくやつ、今日も頑張ろうねっ」

「おう」

ゆーきが声をかけてきた。

まあ、生放送とはいえ、俺等は何回も出てるからな。

でも、今日は練習中から声が出にくかった。
いけるよな・・・？

うん、大丈夫大丈夫。

真っ暗だったスタジオに、ライトアップがされた。
もちろん、俺たちのいるステージにだ。

イントロが始まった。

ああもう、スカートってすかすかするーっ。

『瞬きしないで私を見つめて』

ゆーきが歌う。次は俺の番だ。

“まっすぐに私だけを”

・・・。。。

会場の盛り上がりが突然消えた。

ゆーきも俺の方を驚いたように見ている。

声が、出ない。

歌ったつもりだった。

でも、出ない。さっきまで出ていたのに。

なんで。どうして。

+ + +

あの生放送が終わった後、私はさくやに声をかけた。

「ねえ、大丈夫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大丈夫、なわけないかあ。

だってあんなにいっぱい集まってくれたファンの目の前で声が出なかつたんだから。

「ねえ、もう高音でないの？」

そう聞くと、さくやは首を縦に振った。

もう15歳だもんね。もうさくやの友達はみんな変声期来てるもんね。

そうなれば、どうしようという気持ちが出てくる。

事務所にさくやのことを言うしかないのかあ……。

そうなるともう解雇だよな。

もう……芸能界には戻れない。

そう考えると、胸が痛む。

でも、

ずっと私たちのファンでい続けてくれた人達はどうなるんだろう？

私達は人として最低の事をやってしまった。

人の心を踏みにじってるも同然なんだよ。

ねえさくや。

どつすねばいいのかわかんないよ。

そのあと、さくやと一言も口を利くことなく家路についた。

次の日、私はいつも通り起きてトーストを頬張りながらニュースを見ていた。

そのとき、芸能ニュースの特集が始まった。

アナウンサーが原稿を読み上げる。

『えー、昨日のある音楽番組に出ていた今話題の2人組みユニット、きゅーたーずのさくやさんの声が出なかったそうですね。澤田さん、どう思われますか？』

その言葉にトーストを喉に詰めてしまいそうだった。

『そうですねえ、ストレスが原因ということもありますし……。喉の調子が良くなかったのかもしれないねえ』

澤田という人は物深げな顔をしながら答える。

おいおい……。

これ私たちの事じゃん！！

すぐにケータイをとってさくやにかける。

2コールほどなったところでさくやが出た。

「なんだよ……」

声が枯れている……。やっぱり変声期かな。

「さっきのニュース見た!？」

「見てねえけど」

「私たちの事だったんだよ！　ねえバレちゃうかもしれない!！」

そんな私をよそに、さくやの返事はそっけなかった。

「……ふうん」

………。

絶句。

「ふーんって……ちょっとオ!！」

「俺眠いから寝るわぁ」

「はっ!?!？」

「ブツツ。ツーツー……」

あんまりだ……。

私ひとり焦ってるじゃない………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5038j/>

黑白アーティスト

2010年10月11日20時07分発行